

崔書勉先生と私 『崔書勉先生へのオーラルヒストリーと日韓関係』

静岡県立大学教授 小針 進

「はい、この靴ベラを使いなさい」——ソウル都心にある崔書勉先生のご自宅兼事務所を訪ね、用件を終えて玄関へ向かった。崔先生もちょうど外出するというので、同時にそれぞれの靴を履くことになった。するとそうおっしゃったのである。杖をお使いになる状況のご自分よりも、昭和三十八年生まれの若輩の私へ「お先にどうぞ」というわけだ。

ハツとするようなこうした心遣いを、サラツとされるのが崔先生である。崔先生とは二〇〇七年八月に面識の機会を得たが、研究のための定期的に会うようになったのは二〇一〇年一月からだ。崔先生をよくご存知の大先輩の方々と比べたら、おつきあいの期間は本当にわずかだが、大柄の風格からは想像できない(?)、こうした心遣いに感動する連続である。

崔先生がお生まれになってからの歩みや体験を聞き書きする研究を、私はほかの研究者仲間と二〇一一年四月から取り組んでいる。解放前後の韓国と戦後の日韓関係を深く知る崔先生に語ってもらい、その記録をする必要があるとの思いからだ。こうした作業をオーラルヒストリーという。これまで金泳三元大統領など、日韓関係に関わった数名の韓国人の要人を対象にしてきた。崔先生への取り組みはプロジェクト(「オーラルヒストリーを基礎とした日韓関係史の再構築に向けた学際的研究」)として、文部科学省から科学研究費も得ている。

崔先生のオーラルヒストリーは、やっと一九六〇年の出来事ぐらいまで進んだ。植民地時代、解放直後の韓国政局、張勉氏や金大中氏との出会い、盧基南大主教、張徳秀事件と渡日の背景、マザー・キオ聖心女子大理事長、田中耕太郎最高裁長官、国会図書館アジア・アフリカ課、韓国研究をはじめた契機の話など、どれも興味深い。貴重な記録になるだろう。

ところで、近年、韓国で日本への関心が低下しているといわれる。かつてはあらゆる分野で日本が先進的だったが、いまはそうではないからだ。韓国の発展は歓迎すべきだが、韓国人の目が日本よりも中国に向いているように寂しさもある。もちろん、いまや日韓間には年間五〇〇万人の両国民が往来するほどの人的交流は活発だ（崔先生が日本に來られた一九五七年の両国間往来者数はわずか数千人）。それでも、政治外交関係がギクシヤクシがちだ。

崔先生から戦後日韓関係の話を知っていると、日本人と韓国人はお互いを他の国同士とは異なる「特別な関係」と意識していたように感じる。こうした意識は時には甘えを生むが、だからこそ、今より困難なことが多くても、それを乗り越えてきたのだろう。そして、ハツとするようなこうした心遣いを、サラツとする崔先生のような先人が、それを支えてきたのだと思う。そうした時代が流れてきたファクトを、両国の若者は知るべきだ。